



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4501号 2018.7.21 発行

論説 【熱中症多発】もっと社会的対策を

福島民報 2018年7月20日

猛暑が続き、全国で熱中症による救急搬送が相次いでいる。日本は地球温暖化による気温上昇率が世界平均を上回っており、今後も猛暑日や熱帯夜の増加が考えられる。自分や家族を守る自己防衛策を心掛けるのはもちろんだが、「命に関わる危険」に対処するためには社会的にさらに綿密な対策が求められる段階ではないだろうか。

人間の体は普段は発汗などで体温調節を自然に行っている。しかし高い気温や湿度、体調不良、激しい運動、水分不足などによって体のバランスが崩れて調節できなくなると熱が体内にとどまり頭痛、めまい、けいれんなどの症状が出る。これが熱中症だ。

消防庁による速報では、今年四月三十日から七月十五日までに、全国では前年同期を約二千人上回る二万一千百六十六人が救急搬送されている。本県でも今年同期に四百九十五人が搬送された。

愛知県では十七日、校外学習の小学一年生の男児が熱射病で亡くなった。十九日は東京都の高校体育館で講習を受けていた約七百人のうち二十五人が体調不良を訴えた。

発熱体である人間は大勢集まるだけで暑さ環境は悪化する。団体活動では時間や環境の設定、万が一への対応について注意を払うべきだし、場合によっては中止や延期といった判断も必要になる。適切に判断するためには、学校関係者やイベントの主催者らが熱中症に関して必要な知識を学ぶ機会が必要だ。

文部科学省の二〇一七（平成二十九）年の調査では全国の小中学校（普通・特別教室）で冷房設備を設置しているのは41・7%（本県65・1%）で、三年前の調査より10%以上増加した。設置拡大には児童・生徒の健康維持も強く考慮されるべきだろう。

熱中症の発症は屋内が約四割を占める。特に高齢者は重症化するケースが多い。訪問介護、町内会、民生・児童委員など、行政や地域社会のさまざまな系統から冷房の適切使用、水分補給、不要な外出の自粛などを呼び掛けたい。

都市はコンクリートの建造物やアスファルトの道路が熱を保ち、車の人工放熱などもあって熱中症の一因であるヒートアイランド現象を生じやすい。熱のこもりにくい都市構造も研究されるべきだ。

本県も含め、日本列島の猛暑はまだ続く。環境省の熱中症予防情報サイトは熱中症のリスクを示す「暑さ指数」を提供している。気象庁の高温注意情報もある。

こうした情報も参考にしながら自身と周囲の健康を守りたい。（佐久間順）

<矛盾だらけの障害年金> 1型糖尿病患者（上）

中日新聞 2018年7月19日

けがや病気を理由に日常生活が立ちゆかなくなった人を支援する障害年金。高齢化やうつ病など精神疾患の患者の増加で受給者数は年々増え、厚生労働省によると、二〇一六年度の受給者は二百十万人に上る。しかし、国の審査体制には不透明な部分が多く、不可解な理由で支給が減額されたり、打ち切られたりするケースが後を絶たない。「命綱」であるはずの制度の不備に翻弄（ほんろう）される人々を追った。

インスリンを自ら注射する滝谷香さん（右）と、血糖値の測定をする和之さん。発症以来、一日も欠かしたことはない＝大阪府岸和田市で

「なんで落ちてるん？」。二〇一六年十二月、大阪府岸和田市の主婦、滝谷香さん（36）は、日本年金機構から届いた封書に言葉を失った。1型糖尿病のため二十歳から受けてきた月約八万円の障害基礎年金を打ち切るとの通知だった。



すぐ夫の和之さん（36）の携帯電話を鳴らした。「なんでまた突然？」。夫も絶句している。夫婦は長男の康馬（こうま）君（10）との三人家族。同じく1型糖尿病の和之さんの障害基礎年金約八万円と、パチンコ店のアルバイトで働く和之さんの二十万円弱の月給、そして、香さんの障害基礎年金で生活していた。香さんは生活費をどう切り詰めるかで頭がいっぱいになった。

1型糖尿病は、膵臓（すいぞう）のβ細胞が破壊され、血糖を抑制するインスリンが分泌されなくなる病気だ。若くして発症することが多く、原因は不明。生活習慣に原因がある2型糖尿病とは異なり、食生活や運動習慣では改善しない。毎日数回、インスリンを投与しないと生命を維持できず、逆にインスリンが効きすぎると、昏睡（こんすい）や意識障害を伴う重症低血糖に陥るおそれがある。1型患者を支援するNPO法人「日本IDDMネットワーク」（佐賀市）の井上龍夫理事長は「膵臓かβ細胞のある膵島の移植以外、根治療法はなく、一度発症すると改善することはない」と話す。

香さんは五歳で発症して以来、インスリン注射が欠かせない。低血糖による目まいや手足のしびれにも日々悩まされている。

重症低血糖で激しいけいれんと意識喪失に襲われ、救急搬送されたこともしばしば。夫がすぐ駆けつけられないときに備え、同じマンションに住む母の友人に自宅の鍵を預け、康馬君には「ママがおかしくなったら（糖分を補充する）ジュースを開けて飲ませてね」と教え、缶ジュースをいつも備え付けてある。結婚前は乳児院で働いていたが、勤務中に低血糖で倒れたことがあり、いまは内職をするのがやっと。

和之さんは七歳で発症。香さんとは1型患者の会で知り合った。定時制高校を卒業後、コンビニなど十店舗以上の面接を受けたが、「低血糖で倒れた場合に責任が取れない」と断られ、ようやく採ってもらえたのが現在のパチンコ店だ。

障害基礎年金は、年金機構の審査で障害の程度が一級か二級と判定されれば、定額が支給される。継続して受給するには、約一～五年置きに更新の審査を受け、その時点で等級を満たさないといけない。

香さんには症状が良くなったという心当りはなかった。前回一三年の更新時と比較してインスリンの投与回数は減っておらず、医師の診断書の内容も良くなってはいない。

それゆえ、打ち切りは、納得がいかなかった。インスリンの自己負担も含め、夫婦併せた医療費は月五万円近く。まかなえたのは「ひとえに障害年金があったから」。だからこそ、明確な理由が知りたかった。

A4サイズ二枚の通知書には「障害等級の三級の状態に該当したため」としか書かれていなかった。別の不安がよぎった。

「私が落ちたんやったら、だんなも落ちるんちゃうか」。和之さんは翌一七年に更新を控えていた。しかし、事態はさらに不可解な方向へ展開していく。（添田隆典）

<矛盾だらけの障害年金> 1型糖尿病患者（下） 中日新聞 2018年7月20日

昨年一月、大阪府岸和田市の主婦、滝谷香さん（36）は生活費の切り詰めに追われていた。1型糖尿病のため、二十歳のころから受けてきた月約八万円の障害基礎年金が、前

年の更新で「障害の程度が基準に満たない」として打ち切られたからだだった。

香さんは、同じ1型患者の夫和之さん（36）と、長男康馬（こうま）君（10）と毎月三十万円台後半で生活していた。その中には、血糖を正常に保つため、毎日の投与が欠かせないインスリン代など月五万円近い夫婦の医療費も含まれている。八万円は決して小さい額ではない。

日本年金機構から送られてきたそれぞれの通知に目を落とす滝谷香さん（左）と和之さん＝大阪府岸和田市で

食費を抑えるだけでなく、長男の習い事の費用は両親に負担してもらい、夫婦がそれぞれ入っていた医療保険は掛け金の安いものに切り替えた。それでも足りず、結局、医療費を抑えるため、災害時に備えて買い足していたインスリンから先に消費し、合併症である網膜症や歯周病予防のための通院もやめた。

二十歳から受給してきた障害年金について「もらえるのは当たり前やないし、だからこそ国には感謝しなかった」。でも、突然の打ち切りに「ひょっとして切り捨てやないんか」との疑念も頭をもたげていた。

明確な理由もなく打ち切られたのは香さんだけではなく。香さんが加入する1型患者の会八人もまた、症状の改善はないのに、成人後に受給してきた二級の障害基礎年金を打ち切られていた。うち七人は香さんと同じ一六年に更新の審査を受け、支給停止の通知を受けている。九人は厚生労働省に不服申し立てをしたが決定は覆らず、昨年十一月、処分取り消しを求め大阪地裁に提訴した。

今年一月には和之さんに日本年金機構から通知が届く。和之さんも二十歳から二級の障害基礎年金を受給し、香さんより一年遅く更新を迎えていた。通知には「審査の結果、受給できる障害の程度にあると判断できなかった」との文面。懸念していた、夫への打ち切り宣告だった。

香さんのときにはなかったただし書きが付いていた。それによると、一年間はこれまで通り支給する代わりに、一八年度に診断書の再提出を求めている。その内容と過去の審査結果も併せて精査し、正式に打ち切るかどうかを決定するという。

年金機構はこのとき、和之さんら障害基礎年金受給者千十人に同じ内容の通知を送っていた。背景には、審査態勢の変更がある。審査はこれまで都道府県ごとの事務センターで認定医が担ってきたが、不支給になる人の割合に最大六倍の地域差があることが判明し、昨年四月、東京に新設した障害年金センターに一元化されていた。

地方から東京に認定医が変わった影響で、診断書の内容が同じなのに、「程度が軽い」と判断される事態も。その対象者が昨年度に更新を迎えた和之さんら千十人。年金機構が一年間の支給継続を決めたのは、突然の打ち切りで混乱を避けるための経過措置だった。

夫の障害年金がとりあえず一年間は継続されることになり、香さんはひとまずは胸をなで下ろした。一方、更新時期が一年違うだけで、なぜ夫と自分で扱いに差があるのか、疑問はむしろ膨らんでいる。

六月にあった二回目の口頭弁論。国側は「障害年金の審査は、その時点での障害の程度に基づいて審査するものであり、過去の状態を説明する必要はない」として、香さんらの主張とは平行線をたどっている。（添田隆典）



社会福祉法人風土記<38> 阪南福祉事業会 上 別珍で非行少年の職業補導

福祉新聞 2018年07月05日 編集部

「少年非行の温床は貧困にある。少年たちに職業を与えて自立した大人になる手伝いをしよう」

社会福祉法人「阪南福祉事業会」（大阪府岸和田市・貝塚市など）の源流は、創設者、永野勇吉のこの思いにある。



創設当時の公道授産会の建物

仕事にあぶれた若者たちが巷にあふれている社会は、どこも治安が良くないものだ。1927（昭和2）年に金融恐慌が起こった日本は、29（昭和4）年の世界恐慌でとどめを刺され、白木綿を軸に織物産業で「糸へん景気」を謳歌していた大阪南部の泉州地方にも不況の波が押し寄せた。定職を持たない不良少年問題が深刻になっていた。

「何人か、君の工場で引き取ってくれないか」

別珍加工工場での授産訓練

1932（昭和7）年、大阪府岸和田市（当時の泉南郡山直下村）で、大阪府警の駐在巡査をした後、知人たちと別珍加工工場を営んでいた永野勇吉に、府警時代の先輩から声がかかった。大阪少年審判所（家庭裁判所の前身）から非行少年の職業補導の委託を受け、20人を工場に引

き受けた。これがその後86年も続く福祉活動の出発点となった。

勇吉の孫で現法人理事長の永野孝男（73）が永野家の家系を話す。

「祖先は何代か今の泉佐野市の寺の住職をしていた。勇吉の父親・松之助は寺子屋で子どもたちを教えている、明治5年には訓導という辞令をもらい教師をしていた。だが42歳で世を去り、その息子の勇吉は18歳で大阪市に出て炭屋を開いたが従業員に売上金を着服され1年で店を畳んだ。途方に暮れて天王寺公園のベンチに腰を下ろしていると、新聞で大阪府警巡査募集を知り、巡査に採用されました」

短気だが、正義感は一歩強く、世の中の役に立つことをするという思いを口にしてきた。子どもや若者の更生に協力するという冒頭の言葉は、そんな生い立ちから自然に生まれたものだった。

初めて少年20人を受け入れた翌33（昭和8）年には、工場敷地内に職業訓練施設「公道授産会」を開設した。これが司法省より少年保護団体として認可され、受け入れ少年の数もその後、100人程度にまで増えていった。

寮舎、炊事場、食堂、新工場が次々と建てられ、順調に福祉活動がスタートしたその矢先、一気に倒壊する悲劇に見舞われた。34（昭和9）年9月に西日本一帯を襲い死者・行方不明者3000人超の大被害を与えた室戸台風によって、新旧工場が跡形もなく倒壊したのだ。

全国からの義援金で復旧工事にかかったものの、翌年にも大雨の被害に遭った。近くを流れる牛瀧川が増水、橋が次々と落ち、濁流が家屋に流れ込んで家財道具が流失した。

だが、最大の災禍は戦争だった。1930年代に入ると日中関係が悪化、中国大陸での戦火が拡大していき、国内は物資不足が深刻化していった。別珍工場も38年、廃業を余儀なくされた。

その当時、病気入院するなど体調がすぐれなかった勇吉に代わり、岸和田紡績に勤めていた息子の永野孝（前法人理事長、1914～2003年）が家業の手伝いに入った。

孝も子どもの頃から病弱で、徴兵検査は「丙種」だったが、工場を軍需会社に売却し、その跡地に収容した少年たちの作業場を造り、父の福祉の志を継いだ。大阪市内の文具店と話を付け文具加工の仕事を請け負い、100人ほどの収容少年に仕事の間を作ったのだが、「当時はよく逃亡事件が起こったものだ」と孝は述懐している。

1941年日米開戦から太平洋戦争が本格化すると、戦時体制下の国家総動員法により、43年、「少年保護施設を錬成道場に転換せよ」という命令が出た。錬成道場とは、当時、各地の軍需工場に徴用されていた工員のうち、無届欠勤、なまけ・さぼり、上司の命令に従わなかった者を一定期間収容して精神をたたき直す「懲罰機関」だった。

「私の力では到底できない」と断る勇吉だったが、大阪少年審判所の再三の命令に断り切れず、施設建物に「産業青少年第三錬成道場」の看板を掲げざるを得なかった。

住友金属、佐野安ドック、名村造船、東亜バルブ、大阪アルミ、日鉄広畑など関西一円の軍需工場から16～40歳の男たちが60日間の特別錬成のために送り込まれてきた。

「今考えてみると、よくあんな無茶なことがやれたなと戦慄せんりつを覚えるくらいだ」と、後日語った孝自らが先頭になってやった特別錬成の内容は――毎朝5時起床、薄氷を割って牛瀧川に入ってみそぎ、道場に戻って神前で1時間正座、雪の降る日にパンツ一つで近くの久米田池の周囲を3、4周ランニングし、時には大阪市・住吉の護国神社まで往復マラソンも敢行――という懲罰的色彩の濃いメニューだった。

そして45（昭和20）年3月13日、初めての大阪大空襲。大阪全市が火の海になり、南に約30キロ離れた岸和田市でも夜に新聞が読めるほどだったという。紀州沖に帰還するB29爆撃機が施設上空を通過した際、何発か焼夷弾を投下したが、施設に被害はなかった。

「その前日に生まれたのが私です。おふくろは赤子の私を抱えて防空壕から一步も出ずに無事でした」と話すのは孝の長男、孝男。やがて3代目のバトンを継ぐ永野孝男現理事長である。

社会福祉法人風土記<38>阪南福祉事業会 中 働く母親の声くみ 24時間保育



福祉新聞 2018年07月12日 編集部
マスコミは24時間保育を打ち出した八木保育所を応援し、認可しようとしぬ厚生省に批判的な報道が相次いだ

戦時中、国策の「特別錬成道場」と化していた岸和田の施設は、終戦後すぐに元通りの少年保護団体に復元した。毎日のように戦災孤児と浮浪児を受け入れ最大200人にまで膨れ上がった。

「入所してくる子どもたちは栄養失調で骨と皮だけだった」と2代目理事長の

永野孝が回想する。食料も不足し配給米とジャガイモ、サツマイモ、大豆、コーリャンとあったしるもの。

おまけに水不足。園内に7カ所井戸を掘ったが鉄分が強く、飲用・洗濯・入浴には不向きで、使えるのは1カ所だけ。リヤカーにたるを積んで保母たちが牛瀧川まで水くみに行く日々が続いた。

そもそも職業を通して少年を更生に向かわせるという趣旨で始まった福祉施設なのに、作業そのものがない状態だった。

「このまま子どもたちを遊ばせておくわけにいかない」と考えた孝は、大阪府林産課に掛け合っ、岸和田市河合町の山林を買って薪炭の生産に乗り出した。山小屋を造り少年たちと泊まり込みで松の木を切っては薪を作り、炭焼きをした。製材、木材の販売で財政

基盤を支えた。

佐野職工学校（今の府立佐野工業高校）を卒業して岸和田紡績のエンジニアとして働いていた孝には、もの作りはお手の物。園内の倉庫や保母宿舎を建設する際、保母たちと協力して砂や砂利を牛瀧川から採取し、鉄筋工事も自力で完成させたほど。

組織も時代の波に洗われた。1947（昭和22）年の児童福祉法制定に伴い、翌年に少年教護院「岸和田学園」として認可を得て、さらに48年には財団法人の認可を得て、児童養護施設「岸和田学園」に生まれ変わり、52年に社会福祉法人となり現在に至っている。

「もはや戦後ではない」と政府が宣言した1955（昭和30）年前後から、繊維産業が伝統的に盛んだった泉州地域にも戦後復興景気の波が及んできた。織機が「ガチャン」と1回音をたてて動くと同時に1万円の利益が出るという意味で「ガチャ万時代」という言葉が生まれたほどだ。

戦前から繊維産業は女工、女性労働者によって支えられてきた。泉州地域も沖縄、九州、四国、中国地方の中学卒業者が集団就職する時代が長く続いた。そうした女性たちはやがて地元の男性と結婚、母になる。子育てしながら夫婦共働きをしないと生活が楽にならない。

「うちの子どもを預かってください」。ある日、岸和田学園に幼児を抱いた母親が相談に来た。

「いやいや、うちはそういう施設じゃないから。保育所で預かってもらったら」と断った。1958年に施設の創設者であり父親でもある永野勇吉が死去した。2代目理事長を継いだ孝は、働く母親の声を耳にして、地域の事情を調べてみた。

景気のいい工場では勤務が2部制、3部制で昼夜問わず機械が動いている。ところが当時の公立保育所は午前8時半から午後4時半までの8時間保育で、早朝と深夜の勤務のある母親たちにとって切実なる悩みだった。

「これは放っとけん!」。生活・労働実態を知ると、まず岸和田市長に市立保育所の保育時間の延長を要求しに行った。いい返事はなかった。親譲りの短気である。「行政に任せていたらあかん!」と自分の施設で保育所をつくろうと決意、「24時間いつでも開放の保育所」を合言葉に1967（昭和42）年、岸和田市今木町に「八木保育所」（定員80人）を新設した。

ところが思わぬ壁が立ち上がった。厚生省が認可しないというのだ。「保育所はあくまで児童の福祉のための施設。子どもの面倒を見られない母親は夜間まで働くべきではない」としゃくし定規の言い分。

孝は何度も上京して「地域の実情を考えたら、物価高の今、母親が働かざるを得ない家庭が多い。勤労者が安心して利用できる保育所であるべきだ」と地域福祉の理想を情熱的に説くが、平行線。

そんな激突を新聞、テレビが全国ニュースで報じた。大半は八木保育所支持だ。一躍有名になり、「厚生省の横暴に屈することなく大衆のために戦い抜いてほしい」など全国から激励の手紙が231通も届いた。

八木こども園の藤縄貴司園長（左）と妻の綾副園長



当初、無認可でスタートしたが、マスコミの応援もあって、3カ月後に認可は下りた。補助金をもらうという妥協の産物で保育時間は午前6時半～午後8時となった。ただ日本で初めての長時間保育を行う認可保育所として、歴史の扉を開いた。翌年、国の施策に「延長保育」という言葉が出てきた。

岸和田の小さな保育所の先駆的な取り組みが保育行政を動かしたのだ。「誰のための保育所なのか」「福祉とは何

なのか」という孝の根源的な問いと権威におもねらない情熱とが、新たな現実を生みだした。

その八木保育所は現在、「八木こども園」となって51年目を迎えている。藤縄貴司園長（47）綾副園長（47）夫妻をはじめ、25人の保育教諭が0歳から就学前までの乳幼児139人を午前7時～午後7時預かる。

「伝統的に音楽活動が盛んで、昨年まで合奏のマーチングバンド大会で子どもたちは張り切っていました。これからは新たな遊具を入れて広い園庭を活用していきたい」と藤縄園長は、少子化時代を迎えた次の半世紀の夢を描く。

社会福祉法人風土記<38>阪南福祉事業会 下 卒園後もわが家 憩える工夫



福祉新聞 2018年07月20日 編集部
中庭に水やりする長野博子氏

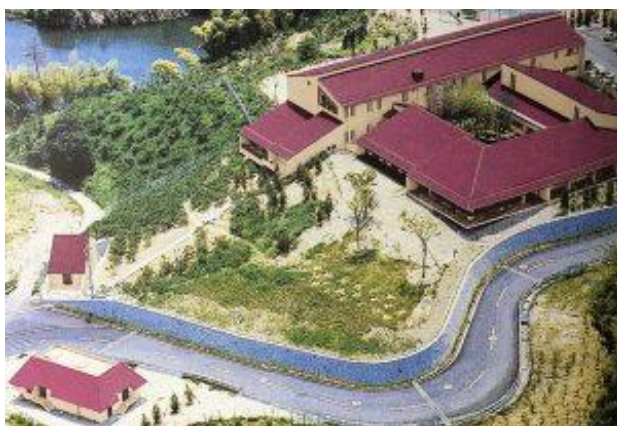
「大きいことはいいことだ」という価値観が戦後長く日本社会に居座っていた。児童養護施設もそう。一つ屋根の下で何十人もの子どもたちが集団生活をする形が一般的だった。

21世紀に入るところから「小さいことがいいことだ」に変わった。定員170人という大阪府内でも有数の大舎制施設だった岸和田学園も、分園を重ねて、より子どもと身近に寄り添える小規模ユニット型に変わった。

「2008年に完成した『あおぞら』（66人）が第1号で、昨年『あんだんて』（24人）、今年『あにまあと』（30人）がそれぞれ新築され、それに地域小規模グループホーム4カ所（24人）を併せて、岸和田学園が小分けされました」と説明するのは、阪南福祉事業会の永野孝男理事長（73）だ。

「単に住まいを小規模にして個室にしたというだけではない。施設内に緑とアートを取り入れて明るく居心地の良い空間づくりを目指しました」

なるほど、中庭には色とりどりの草花が咲き、心がなごみ癒やされる。そこで水やりをしていたのが岸和田学園など勤務46年という長野博子（75）。8年前には瑞宝単光章を受章したベテランだ。リタイア後も草花の世話を日課にしている。



貝塚市三ヶ山の施設全景

「親の貧困、蒸発、虐待でここに来た子どもたちが、入学式や卒業式に親の代わりに出席してと私を指名してくれたのがうれしかった。この仕事の醍醐味は卒園後も会いに来てくれる子が多いこと。20年ぶりに会った男の子は『おばちゃん、まだ生きてたん？』と言うから、『まだまだ、人生は80歳からやで』と言い返しましてん」と、いかにも関西漫才風なやりとりが楽しげに飛び交う。

今年新築され分園したばかりの「あにまあと」には、子どもたちの居心地を最大限に考慮したデザインが随所にあるという。理事長の妻、永野良子施設長（64）が案内する。

「2階建て吹き抜けで一体感をもたらした」「わざと死角を作って『隠れ家』にした」「踊

る」

り場を仲間が集まれるセカンドリビングにした」「相談室には誰にも合わずに外の階段から直接入れるようにした」――

ここをわが住まいとして憩える工夫が施されている。卒園後もわが故郷だと思ってもらえるような仕掛けもある。毎年正月「元日はおせち、2日がトンカツ、3日がカニチリ」を長い間変わらぬルーチンにしている。卒園生もたくさん帰って来て、在園中と同じことを毎年しているのに気付くと故郷意識、実家感覚が刺激されるらしい。

施設との絆を強くしている代表格は、大衆演劇の女形スターとして活躍中の門戸竜二（49）だ。両親の蒸発で、きょうだい5人が施設で育った。竜二は小学5年から中学卒業まで岸和田学園にいた。いろいろな職業を経験したが、見る人を感動させる役者の道が忘れられず日本舞踊を習い大衆演劇の道を歩んだ。今年は大先輩の梅沢富美男公演に招かれ、妖艶な女形競演で客席を沸かした。

施設時代に世話になった良子施設長から頼まれた。「子どもたちに、生きていていいんだよ、人生の主役は自分自身だから、という自己肯定感を持たせるには演劇セラピーが効果的。子どもたち一人ひとりにスポットライトを浴びさせたい。その手伝いを」と。

落語、だんじり太鼓、手品、バトンなどそれぞれが出し物を舞台で見せる夏恒例「にじいろ“夢、コンサート”」に門戸竜二は快く協力、今年8月も子どもたちと共演する。チャリティー公演も行い、卒園者の成人、結婚、再就職などの節目に金銭援助するための「にじいろ“夢、基金”」にも積極的に応援している。

さて、長時間保育に道を開いた阪南福祉事業会には他にも日本初がある。1998（平成10）年に全国第1号で開設した「児童家庭支援センター」がそれ。近年増加する児童虐待、不登校、発達障害という現実はどう対処するか、その予防とケアをバックアップするのが狙いの専門機関だ。

もう一つ、時代の波に積極的に取り組んだのは、2002（平成14）年に開設した「情緒障害児短期治療施設あゆみの丘」（大阪府貝塚市）。いわゆる障害児施設ではなく、虐待を受けるなど、いろいろな原因で自分に自信が持てなくなったり、人とうまく関われなくなった幼児から高校生のための治療・療育の場だ。現在は小学2年生から高校3年生まで45人がここで生活している。虐待にあった、いじめられた、などのトラウマに苦しむ子が入所している。

生きづらさに苦しむ子どもたちと真正面に向き合う、難しいが大切な仕事。白土隆司施設長（72）は「自尊心や自己肯定感が弱い子が多いので、まず自信を持ってもらう。そのためには何かできたらほめる。その繰り返し。社会的なスキル、例えば指示に従う、大人の助けを求め、適切に自分に注意を引くなどを徐々に積み上げていく。生活指導員、社会福祉士、保育士、臨床心理士などスタッフは29人いて、朝会などでケーススタディを報告しています」と児童心理治療の難しさとやりがいを口にする。

年間10万件を超えた虐待事案と、年々増えていく発達障害に苦しむ子の数。現代社会の特徴といわれる“心の奥”を解明し光を与える処方箋はあるのか。ここでも模索が続く。

【網谷隆司郎】

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行